

派遣サポーターの活動を通して

派遣サポーター（令和元年度長崎派遣参加） みずもと めい 水元 明生

この度、令和6年度多摩市子ども被爆地（広島）派遣事業に派遣サポーターとして携わり、事前活動から成果報告会まで派遣員とともに行動した。その中で最も意識したことは、年齢や学年が異なる派遣員たちの気持ちをどのように同じ方向にまとめ、広島訪問を迎えられるかである。中にはおとなしい派遣員、活発な派遣員などさまざまなメンバーがいる中で、年齢の近いサポーターである私が全員に声をかけて様子を聞き、なるべくリラックスした状態で広島に行けるように意識し、自身の過去の長崎派遣での経験や、その時に感じたことを積極的に派遣員に話すようにした。また、戦争に対する周囲の意識と自身の意識の温度差も感じていたため、その点を強調して派遣員に伝えた。何故なら、2025年で戦後80年を迎え、戦争体験者が少なくなり、その記憶が薄れているからである。自分自身が、令和元年度の長崎派遣を通して東京と長崎の人の意識の違いに衝撃を受けたからこそ、いかにこの派遣に携わることが貴重な体験であるのかを全員に感じてもらい、記憶を伝承する大切さや、記憶が薄れているという危機感を少しでも持ってもらうことが私のサポーターとしての目的の1つでもあった。

広島派遣当日、わくわくした気持ちの中に少しの緊張を交えた派遣員の表情を見て、これは充実した活動になると確信した。現地に足を運ぶとやはり式典前後の町の様子は東京ではなかなかない、独特な神聖さや物々しさを感じた。その事について派遣員に話を聞いてみたら、はじめて目にする、独特な物々しい光景に驚いている様子だった。衝撃を受けた感覚を忘れてほしくないと思い、全員に話を聞き、その感覚を忘れないでほしいと伝えたのを覚えている。

その他、派遣サポーターとして、活動中に困っている派遣員を見かけた時には声をかけること、グループワークで考え込んでいる派遣員がいた時には自分自身の過去の体験を伝えて、話題を切り出すことも行った。また、現地では派遣員の先導や道を広がって歩かないように声をかけるなど派遣員の安全面も考慮した上で、コミュニケーションを図るように努めた。

派遣員が戦争や平和に真剣に向き合っている姿を見て、日本に住んでいる以上、全員が派遣員と同じくらいの気持ちで平和活動に取り組んでほしいと強く願うきっかけになった。改めて多摩市子ども被爆地派遣事業に携われる貴重な機会を得ることができて、ありがたさとともに、戦争の悲惨さや平和の尊さなどについて学ぶ重要性を実感している。特に、広島に足を運ばなければわからないであろう「五感」を伝えることこそが自分のすべき事ではないだろうかと考えている。そのためにはまず自分が感じたことを継承することが重要である。今後も多摩市の平和啓発事業に携わり、企画・運営などに協力していきたいと考える。